Close UP 文学部
Faculty of Letters

文学部
総合教育科目の魅力と未来

特集 Special 1 feature

「人間とは何か」を探る文学部ならではの学びの姿をお伝えします。

文学部准教授
横山 佐紀（よこやま さき）
専門はアメリカを中心とするミュージアム・スタディーズ。国立西洋美術館で得た知見を授業に活かす。総合教育科目運営委員。

文学部教授
中坂 恵美子（なかさか えみこ）
専門は国際法学。国家主権と人の移動、特にEUにおける移民・難民問題がテーマ。総合教育科目運営委員。

文学部長補佐／文学部教授
池田 賢市（いけだ けんいち）
専門は教育学。教育制度･行政を教える。文学部長補佐として総合教育科目を中心とした新しい学びへの改革を推進中。

教員鼎談

文学部では13専攻の授業に加え、各専攻の枠や年次を超えて履修できる総合教育科目を開講しています。さまざまな学問分野のもと、文学部らしい「知の統合」をはかる総合教育科目について、運営を担当する3人の先生に語っていただきました。

知的好奇心を刺激し、視野を広げる総合教育科目

専攻を超えた多角的な視野を得る

池田　現在文学部では中坂先生、横山先生が中心的に担われている総合教育科目の改革を進めております。お二人それぞれ簡単にどんな授業を担当していらっしゃるか、お話しいただけますか。

中坂　私は専門が国際法で、昨年の4月から総合教育科目の国際法A・Bなどを担当しています。移民・難民論という授業では、法的な側面だけでなく政治や経済的な側面も含めて取り上げています。

横山　私も昨年の4月に着任しました。それ以前は国立西洋美術館に11年間勤めていました。ミュージアム・スタディーズと呼ばれる最新の学問分野があるのですが、美術館や博物館が社会に対して何ができるのか、どういう貢献ができるのかということを考えてきました。授業では現代映像論などを担当しています。

池田　どういう授業の進め方をされていますか。

中坂　少人数の授業では学生に発言の機会を設けたり、グループワークの時間を設けたりしています。他の専攻の学生と意見交換することで自分の専門だけでは気づけない、多角的なものの見方ができるようになってほしいと思います。たとえば難民の話であれば、ドイツ、中東諸国、日本の問題など、それぞれの関心から皆さん積極的に発言してくれますね。専攻で積み上げたものがあるので、視点のしっかりした意見が出てきます。そこを活かしています。

横山　イメージ人類学という授業では、スライドを見てもらいながら授業を進めています。先に作品の解説をしてしまうと人はそれ以上のことを考えなくなってしまうということを美術館で経験しているので、まずは自分の力

専攻や興味の異なる学生との意見交換から学べるのが魅力(池田)

教員鼎談

で見て、思考してもらうことを重視しています。学生はしっかり発言するし、他の人の意見も熱心に聞いています。

池田　専攻が異なり、自分とは違う物の見方をする人同士の対話ができるところに総合教育科目の魅力があるんですね。

一般教養とは異なる「知の統合」

池田　この総合教育科目は、従来型の「一般教養」とは考え方がまったく違うと思うのですが、その点を少し説明していただけますか。

中坂　現在総合教育科目として提供されている科目は150以上もあります。経済学、文化人類学、音楽といった科目のほか、脳科学、自然地理などの理系科目、語学はスペイン語、イタリア語、ロシア語に加えギリシャ語やラテン語まであり、専攻だけでは学べない科目がたくさんありますので、いろいろな分野にアプローチできます。

身近な問題から大きなテーマを見つけるきっかけにしてほしい（中坂）

横山　専攻の学びを深めていくことはもちろん大事ですけれど、そこから広がっていく興味や関心を切り捨てずに育てていくことができるんですね。

中坂　ある程度専門分野を勉強したうえで、総合的な教養を身につけるために受けていただくのもいいかなと思っています。自分なりの核になる視点ができたうえで、他の学問の視点も知り、多角的に見られるということを知ってほしい。そこから自分の専門にフィードバックすることは多いと思います。

横山　専攻という一つの軸があって、そこから他の分野に学びを広げられることが利点だと思います。ですから、単に知識を増やすということではなく、総合的に、学際的に考える方法を身につけるということになります。

中坂　藤垣裕子先生が『教養教育と統合知』（※1）という本の中で「後期教養教育と統合学」ということを書いていらっしゃいます。つまり、専門を学ぶ中での教養学習はさまざまな知の統合であるということです。

池田　専攻で学びながらも多彩な領域での思考を知り、知の統合を図る相乗効果があるということですね。

身体感覚に結びついた学びを

池田　大学に入るまで自由な学びをした経験がなく迷っている、という学生にも総合教育科目は役立つのではないでしょうか。

中坂　やはりいろいろな経験をすることがいいと思いますので、初年次教育では、積極的に外に出て行く課題も出しました。キャンパスメンバーズ制度（※2）を利用した博物館や美術館の見学、衆・参議院や都・市議会の傍聴、裁判所の見学などです。授業の一環として自分でテーマを決めてそれを現地で確かめるという作業をしてもらっています。ほかにもボランティアとかインターンシップを利用して現実の社会に出て、教員以外の大人と話す機会を持つことからヒントがつかめることもあると思います。

池田　総合教育科目の中のプロジェクト科目では、たとえばミュージカルをテーマに役者さんや演出家の方など、プロを招いて話を聞く授業を企画しているのですが、専門家の話を聞く、現場に触れるということも良い機会になるのですね。

情報を得るだけでなく五感で学んで身につけることが大事（横山）

横山　問題は机に座っているだけでは見えてきません。今はインターネットで何でも情報を入手できますが、触る、匂いを嗅ぐ、空気を感じるという、五感を使い、身体で感じる学びや経験が大事だと思います。身体をもって現場に出かける経験を重ねることで、五感を使う「勘」がつかめるようになります。

池田　確かにそうですね。最近AIが注目されていますし、教育の世界でもデジタル化が進む中、総合教育科目は何をめざしたらいいと思いますか。

横山　私は視覚と関連して触覚にも興味を持っています。人間の感覚は圧倒的に優れており、AIにはまだ体や皮膚感覚はありません。デジタル化が進むほど、五感と結びついた学びの意味がむしろ重要になっていくと思います。

中坂　やはり多様な視点を持つことだと思います。社会に出て、一つの視点でしかものが見られないと行き詰まってしまいます。いろいろな視点を身につけることは就職活動でも強みとなります。

池田　そのためにも総合教育科目は、学生に対して多彩な刺激を与え、外へ出る機会を提供し続けるべきなんでしょうね。本日はお二人ともありがとうございました。

※1 山脇直司編 東京大学出版会（2018年）
※2 特定の博物館・美術館で学生証を提示すると無料または割引で観覧できる制度

文学部ならではの知の統合

問題を多角的に捉えるための既存の枠組みを超える取り組み
統合的な学びを提供

13 専攻に基づく専門領域の学び

130 を超える総合教育科目の学び

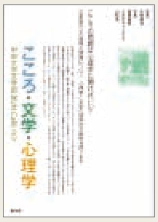
1 本を通して人間と社会を学び、現実社会で行動

文学部の学びの基本は「読む」ことを通して、人間と社会の問題について、多様な視点を学び、時空を越えて考える姿勢を身につけること。この基本が現実の社会に出て、具体的な問題解決をはかるときに実効性のある行動を産み出します。文学部では13の専攻で専門性を深めると同時に、総合教育科目の「入門科目」や「プロジェクト科目」、「グローバル・スタディーズ」などの授業科目、「スチューデント・ライブラリアン」などの高大連携プログラムや学外活動応援奨学金の活用などを通して、幅広い教養を備えた「行動する知性」を現実社会で発揮できる人材を育てています。

CloseUP

新しい取り組みから生まれた２冊の本

総合教育科目の充実をはじめ、体験型学習の導入など、近年の文学部の取り組みから生まれた２冊の書籍をご紹介します。



こころ·文学·心理学
中央大学文学部BUN Caféより
文学部教授 大田美和編著／樹花舎刊

文学部の教員が専門の枠を超えて一つのテーマについて語り合う、トークショー BUN Café の書籍化。この回のテーマは、災害後の心の復興の問題をめぐる、心理学と文学の協同の可能性。

アジアと生きる アジアで生きる
中央大学文学部
プロジェクト科目講義録
文学部教授 榎本泰子編／樹花舎刊

2016年度プロジェクト科目「アジア共同体を考える」の講義録。文学、芸術、宇宙、医療、宗教などの専門家15名の講義を通じ、アジアの人々と共に生きるヒントを探った。『毎日新聞』で紹介。

私の学び 1

毎回異なる分野のプロから他では聞けない舞台裏を学ぶ

私は劇団Ｔｈｅ座というサークルでミュージカルを実際にやっていることもあり、プロジェクト科目の「ミュージカルを紐解く」は、役者さんから裏方さんまで、実際にミュージカルを創り上げている本物のプロの方の話が聞けるので、毎回感動の連続です。元宝塚で女優の音月桂さんが来られた時はその美しいオーラに圧倒され、劇団四季のプロデューサー田中浩一さんからは劇団の歴史や裏話を聞くことができました。ミュージカル指揮者である塩田明弘さんの下積み時代のお話は非常にハードで、やはり一芸をなす人はそれだけの人生を歩んでいるからこそ、ミュージカルは輝いているのだと納得できました。私は西洋史学専攻なので、ストーリーの背景にある歴史的事実を考えながら想像を膨らませるのですが、専攻の違う人には別の見方ができるかもしれません。また、文学部生にとって舞台芸術に関わるさまざまな仕事を知ることは、将来の職業選択にも役立つと思います。総合教育科目の授業は、通常ではなかなか聞けない方の講義があったり美術館に出かけるなど、単に聞くだけではなく、専門外の領域に一歩踏み込んで、考えたり行動する面白さがあります。自分の視野を広げるためにも、興味のあることはどんどん受講したいと思っています。

岩﨑 香南（いわさき かな）
文学部人文社会学科西洋史学専攻2年
私立中央大学附属横浜高校（神奈川県）出身

プロジェクト科目「ミュージカルを紐解く」

http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/guide/curriculum/

役者から裏方まで大人数が関わるミュージカルの魅力

舞台で演じる筆者（右から３人目）

私の学び

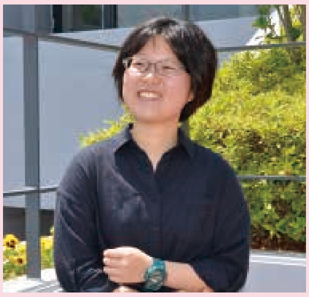
私の学び 2
遺跡発掘にも参加して日本史学の学びを深める

私が所属している日本史学の小林謙一ゼミでは、主に縄文時代の遺跡研究を行っています。年に1、2度発掘調査を実施しており通常は2年次から参加することになります。しかし、私は考古学研究会というサークルのメンバーであるため、幸運にも1年次から測量や発掘作業の補助として参加してきました。これまで三鷹市と愛媛県の遺跡を発掘し、今年は福島県に行く予定です。発掘現場からは住居跡やそこで使われていた土器や石器が出土するのですが、やはり数千年前の人の痕跡が目の前に現れるのは感動的です。出土品は大学に戻ってから決められた手順に沿って洗浄、記録等の作業も行うため、学術的な技術もしっかりと身につきます。また日本史学専攻は、社会・地理歴史・公民の教職免許取得もできるので、卒業後の進路の選択肢にしたいと思っています。日本史学を学ぶということは、日本人の祖先が列島に来てから今日に至る過程を知ることです。本学には先史時代から現代まで、時代ごとに専門の先生がいらっしゃるので、さまざまな視点から日本、日本人について考察を深めることができます。本格的に日本史を勉強するには最高の環境なので、残りの2年間、新たな発掘と卒業論文作成に取り組むことが、とても楽しみです。

本格的な発掘作業

遺跡研究
http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/major/jpn_history/

住居跡や土器を慎重に発掘する



貝沼 優佳（かいぬま ゆうか）
文学部人文社会学科日本史学専攻3年
新潟県立柏崎翔洋中等教育学校出身

私の学び 3
自主性を重んじる環境の中で文武両道に磨きをかける

母親に連れられて幼少のころから水泳を続けており、小学校5年生から水球を始めました。高校はインターハイに30回以上連続出場で、私が在籍していた年に4回目の優勝をした強豪校です。そのため、進学に際してはいろいろな大学から声がかかり、水球の強豪大学もありました。実は中央大学の水球部は決して強い方ではなかったのですが、そういうところで自分が頑張って強くしていく方がやりがいはあると思い、スポーツ推薦を利用して本学に進みました。

スポーツ推薦で入学した以上、部活動で成果をあげて貢献することはもちろん大事ですが、自分としては学生である以上、勉学と両立してこそ意味があると思っています。むしろ高校まではスポーツ優先で過ごしてきた分大学での学びが新鮮で、授業に出るたびに新しい発見があり、文武両道の学生生活を楽しんでいます。また私もそうですが、スポーツ推薦で寮に入っている学生も多く、声を掛け合いながら切磋琢磨する環境が整っているからこそ、両方に集中できるのだと思います。

私は1年次に関東学生リーグで新人賞をいただきましたが、まだチーム全体のレベルアップには至っていません。これから3年、4年となり後輩を指導する立場になってからが本番だという思いもありますので、残された2年間でインカレベスト4以上を目標にして、良き伝統を残せるように頑張りたいと考えています。

文武両道
http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/major/socio_info/

ポイントゲッターとしてチームを牽引

新井 謙之介（あらい けんのすけ）
文学部人文社会学科社会情報学専攻3年
私立埼玉栄高校（埼玉県）出身

Close UP
文学部
Faculty of Letters

2

さまざまな資格取得をはじめ
多彩なキャリアデザインをサポート

就職に活きる実践的な学び

1 文学部ならではの学びを活かし97%以上の就職率を達成

現在文学部に設置されている科目数はおよそ1000におよび、多様なジャンルを受講することで柔軟な思考力と多角的な視点を養います。また少人数で議論する演習や、フィールドワークなど実践重視の授業では、論理的な表現力とコミュニケーション能力が身につきます。こうした日々の学びが社会人として必要な基礎力を養うことにもつながり、あらゆる業界、職種に通用する知性と教養に結びついていることは、高い就職率が証明しています。

2 文学部ならではの資格取得と柔軟なキャリアデザイン

一般企業への就職はもとより、文学部ならではの資格取得も大きな魅力です。特に教育学専攻を設ける本学では、教員免許取得に必要な学びをしながら多彩な教養を身につけることで、学校教員に限らず、企業や公務員などさまざまな分野の教育関連の仕事に就くという柔軟な選択も可能となります。価値観が多様化し、働き方の改革が進む今日、文学部は学生の描くキャリアデザインに沿った、幅広い学びの場を提供しています。

文学部で取得できる免許と資格

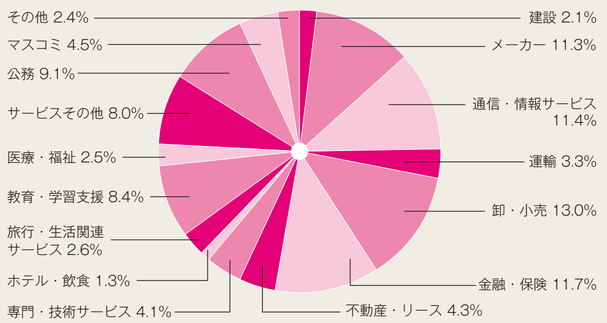
■教職

国文学専攻	国語
英語文学文化専攻	英語
ドイツ語文学文化専攻	ドイツ語・英語
フランス語文学文化専攻	フランス語・英語
中国言語文化専攻※1	中国語・国語・英語
日本史学専攻	社会・地理歴史・公民
東洋史学専攻	社会・地理歴史・公民
西洋史学専攻	社会・地理歴史・公民
哲学専攻	社会・地理歴史・公民
社会学専攻	社会・地理歴史・公民
社会情報学専攻	社会・地理歴史・公民・情報
教育学専攻※2	社会・地理歴史・公民・国語・英語
心理学専攻	社会・地理歴史・公民

※1:中国語言語文化専攻は、表中より「中国語」·「国語」または「中国語」·「英語」の選択となります。
※2:教育学専攻は、表中より「社会・地理歴史・公民」または「国語」または「英語」の選択となります。

■社会教育主事　■学芸員　■司書　■司書教諭

［2017年度 文学部卒業生 業種別就職状況］



Close UP

文学部生（2017年度卒業）の就職状況と傾向

文学部卒業生の就職先は驚くほど多方面にわたっています。文学部の就職先の主要業種は、■卸・小売　■金融・保険　■通信・情報サービス　■メーカーとなっています。また、他学部に比べて教育・学習支援業に就職する学生が多い傾向にあります。出身学部によって就職に有利・不利はありません。文学部で学んだ「知識」と「教養」と「課題へのアプローチ・スキル」は、社会で高く評価されています。

私の学び

私の学び 4
海外での発表を経験し将来につながる物の見方を学ぶ

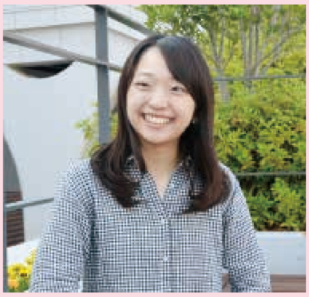
グローバル・ソシオロジー・プログラム（GSP）

http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/characteristic/subject02/

グローバル・ソシオロジー・プログラムは、社会学的テーマに基づいた研究を英語でプレゼンテーションするという授業で、在学中に海外で英語を使った活動をしたいと考えていた私にはぴったりでした。20名程度の授業でしたが、私はワーキングプアをテーマにしたグループに入りました。先行研究を調べることから始め、労働ユニオンの方や弁護士の方にお会いして取材したり、実際に問題に直面している方のインタビューを行うなど、分担しながら進めます。こうして約半年をかけてまとめた研究を英語に訳し、上海大学で大学院生と教授を前にプレゼンテーションを行いました。英語での発表も中国に行くことも初めてでしたが、まったく価値観の違う学生と意見交換ができたことは、貴重な経験になりました。この授業を通じて、困っている人たちの力になれる仕事がしたいと思うようになり、困っている人の力になれるかどうかに重点を置いて、職業選択をしたいと考えています。文学部の学びは、実学とは異なるように思ったこともありましたが、社会学的な考え方を学んだことで、仕事や生活の根幹に関わるさまざまな物の見方を身につけることができ、価値観が多様化している現代にはむしろ一番役に立つのではないかと思っています。将来のことも考えながら、もっと勉強を深めていきたいと考えています。

上海大学でのプレゼンテーションの様子

上海大学の大学院生（ピンクのコートの女性）に街を案内してもらう



すぎうら ともえ
杉浦 朋恵
文学部人文社会学科国文学専攻3年
東京都立武蔵野北高校出身

私の学び 5
企業での経験を積み教員をめざすという柔軟な選択肢

教育実地研究

http://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/letters/major/education/

教育学専攻のユニークな科目として教育実地研究があります。教育の現場である学校だけに捉われず、教育に関わるさまざまな分野から教育を取り巻く環境を学ぶことが目的です。具体的には、青少年問題、子育て支援、へき地教育など6つのテーマに基づくグループに分かれてフィールドワークを行います。私は青少年問題を選び、現実社会での非行防止対策や、非行に走った少年の更生について調べました。事前に八王子の鑑別所や東京家庭裁判所の立川支部で調査官の方にお話を聞いたうえで、本番の調査は石川県内で行いました。現地ではスクールソーシャルワーカーの方にお会いしたり、少年院や児童生活指導センター、石川県警、定時制高校などを訪問しました。近年の少年院は一人ひとりに寄り添った指導をするため、相部屋から個室に変わる傾向がありますが、その実例を見学できたことは大きな収穫でした。

私は教員をめざしてはいますが、教壇に立つ前に社会経験を積んでおきたいと思い、一般企業への就職を既に決めています。実は教育学専攻にはそういう学生が多くいます。企業での研修や生涯学習など、学校だけが教育の場ではないという現実を考えると、教員養成に絞り込むだけでなく、幅広い学びができることは、本学の教育学専攻だからこその利点だと実感しています。

教育実地研究に参加した学生たち

ひらぐち みのる
平口 稔
文学部人文社会学科教育学専攻4年
埼玉県立和光国際高校出身